

## 森三千代の上海 —金子光晴と放浪の旅へ—

趙 怡

### 序章 上海へ

1928年、詩人金子光晴(1895–1975)は「不倫」した妻との愛情危機を解決するため、その「恋人とつりかえに」彼女を「花のバリ」へ誘った<sup>1)</sup>。とはいえ、懐中十円足らずの無謀な旅だった。中国、東南アジア、フランス、ベルギーをまわり、足掛け五年に至る放浪の旅は、光晴晩年の大河自伝によって延々と語り続けられてきた。その物語の第一幕で、『どくろ杯』というグロテスクな題名にも象徴されるように、文学者夫婦が「陰謀と阿片と売春の上海」のむせかえるような臭気にまみれ、「世界の屑、ながれもの」に混じりこんで過ごした「泥沼のどん底暮らし」は、日本人が「魔都」上海に抱くイメージをさらにふくらませるものとして、人々の記憶に残ることとなった。

しかし、この二人旅は主に光晴の独白によって語られ、同行した妻三千代の声は、あまり聞こえてこない。しかし作家だった森三千代は、当時すでに詩、エッセイ、紀行文などの「習作」を書き残しており、また後には上海生活をモチーフにした「病薔薇」、「通り雨」のような短編小説も発表している<sup>2)</sup>。晩年病気のため文筆活動を断念せざるを得なくなった森三千代は、いまでは単に金子光晴の妻として言及されることが多く、その作品も殆ど忘れ去られている。しかし三千代の作品は、夫婦の上海生活をきわめて重要な角度から補っているだけでなく、光晴の『どくろ杯』の原型とも言うことができる作品世界を構築している。さらにそれ自体も一九二〇年代の上海を描いた優れた文学作品としても認められるべきだと考える。小論ではまず調査を通して確認できた森三千代の作品を、光晴および日中両方の関係者の記録と照らし合わせながら分析する。併せて、二人の上海生活の実態を、一九二〇年代の上海という時代の様相を視野に入れながら検証し、この旅が持つ意義を考えてみたい。

まず以下に、金子夫婦の上海滞在中の具体的な活動内容を、あくまで分かった範囲内で要約しておく<sup>3)</sup>。

1928年11月末 上海着。(三千代『『東方の詩』後記』)

二、三日後 三千代、マラリアにかかり、内山夫人が薬を持って見舞いに来る。

この頃、田漢は斜橋徐家匯路にある映画撮影所で歓迎会を開き、中国文化人四、五十名が集まった。(三千代「胡弓」)

12月11日 午前九時大福丸に乗り武漢三鎮へ(島津四十起に頼まれ、在留邦人から会費を集める目的)。「七十時間を経」て漢口に到着。(三千代「長江を遡る」)

武漢では12月17日に人力車夫の水杏林が陸戦隊機銃車と衝突し死亡する事件(「武漢水案」)が起こり、反日ムードが高まっていた(19日漢口水案事件後援会が設立され、翌年1月に日貨ボイコット運動に発展する)。「東洋、東洋」<sup>トシヤン トシヤン</sup>と罵られ、軍人達の殺伐とした行列の前を通るなど、光晴夫婦の数度にわたる中国旅行のなかでも、最もショッキングな体験の一つになる<sup>4)</sup>。

正月前に上海に戻る。

この頃 光晴が「艷本銀座雀」と題する春本を一昼夜で書き上げ、謄写版で二百冊刷り、売人の「鼻のぼん助」を介し売ることになる<sup>5)</sup>。

1929年正月前後、友人である画家の秋田義一が来訪、光晴は彼と共に内外綿、鐘紡など日本企業の有力者たちに絵を売り歩くことが多くなる。

同じ時期、三千代と恋人の文通を知った光晴は島津四十起に頼み、三千代の詩集『ムキシュキン公爵と雀』を出版させた(1月23日発行)。

1月26日、夫婦で作家の前田河広一郎を囲む会席に出席する。魯迅夫婦、郁達夫夫婦、林語堂、秋田義一が同席。(『魯迅日記』)

1月30日、三千代の詩集が郁達夫を通して魯迅へ贈呈される。(『魯迅日記』)

この頃前田河と会うことが多くなる。彼を内外綿の工場へ案内する。資産家宮崎議平宅に食事に招かれる(三千代同席)。一緒に四馬路にある妓楼「青蓮閣」を「見学？」(三千代同伴)することも。(前田河広一郎『悪漢と風景』<sup>6)</sup>)

2月10日、旧正月。

3月 郁達夫を通して白薇と付き合いはじめる。(森三千代「病薔薇」)

光晴が上海百景を「広重風」に書き上げたのもこの頃だったと思われる。

3月31日、上海百景展覧会を日本人倶楽部の二階で開く。魯迅が作品二枚を買う。('昼過ぎ、柔石、真吾、三弟および広平とともに金子光晴浮世絵展覧会を見に行き、二点を選び買う、二十元'。『魯迅日記』<sup>7)</sup>)

4月頃、金子夫婦と秋田義一の三人で一ヶ月ほど蘇州へ旅行。

5月はじめ頃、上海を離れる。

以上がこの時期の金子夫婦の上海滞在の大雑把な動きといえるものである。それでは本題に入ることにしよう。

## I 魯迅と森三千代詩集

一九二〇年代の上海は日中双方の文化人が大いに交流の輪を広げ、それを深めていく舞台である。1923年、村松梢風は佐藤春夫の紹介状を持って、上海にいる田漢を訪ね、日本人で初めて中国の「新文学者」に出会うこととなる。1926年1月、谷崎潤一郎が二度目の上海訪問をし、内山完造を通して多くの中国文化人と交流した。田漢と郭沫若の二人と中国の政治問題について深く語り合い、田漢と一緒に欧陽予倩の自宅で楽しい旧正月を過した谷崎は、中国の文化人と深い友情を結んだ<sup>8)</sup>。それ以後金子光晴夫婦、佐藤春夫、横光利一など多くの日本文学者が次々と上海を訪ね、中国新文化運動の担い手たち(いわゆる「留日組」が多い)との間に、様々な交流活動を行ったのである<sup>9)</sup>。さらに1927年10月、魯迅の上海移住に伴って、内山完造を介して日本人の「魯迅詣で」も盛んに行われるようになった。中国文化人の多くが日本留学の経験者だったため、日本文学者との間に、言葉の壁がなく、かつ共通の話題も多いことから、内山書店を介した日中文人の交流ネットワークがこの時期出来上がったと言える。

金子夫婦の上海滞在は、まさにこのような時期と重なっていた。1926年春、二人は帰国直後の谷崎からの七通の紹介状を携え、初めて上海を訪ねた。先に述べた二年後の、夫婦の危機を抱えた貧乏旅行とは対照的な、一足遅れの新婚旅行であり、そのうえ谷崎訪滬の余熱も受け、いたるところで暖かくもてなしされ、二人にとって印象深い旅だった。二年後の春、国木田虎雄夫婦を伴い、再び上海へ来た光晴は、内山完造の紹介で郁達夫と魯迅とも知り合った<sup>10)</sup>。尤もこの留守は三千代が若き大学生と恋に陥るきっかけにもなったのだが。そして今度の滞在は日中交流の中心地ともいえる内山書店のすぐ近くに半年間も住み続け、ここで繰り広げられた様々な交流ドラマを見聞きするだけでなく、自らも参加し、重要な役割を果たすことになった。金子光晴と中国文化人についてはこれまで、彼が語る魯迅、郁達夫のみに注目する論考が多く<sup>11)</sup>、中国側の証言が少いため、交流の全貌はまだ明らかになっていない。実際、金子夫婦と交流のあった中国の作家、詩人、画家などの文化人は、名前だけを挙げても、魯迅、郁達夫、白薇、田漢、欧陽予倩、謝六逸、陳抱一など、その数が多い。中には帰国後も交際が続き、長い間光晴夫婦の記憶に残された文化人も少なくない<sup>12)</sup>。いうまでもなく、これらの交流は二人の上海滞在に大きな意味をもたらした。ここでは一つの実例として、まず森三千代と魯迅、白薇との交友について見てみたい。

森三千代には上海滞在に関わる二冊の詩集、『ムキシュキン公爵と雀』と『東方の詩』がある。面白いことに、二冊とも魯迅と関わりがある。三千代は魯迅と郁達夫について

多くを語っていないが、『東方の詩』『後記』で上海の旅を回想し、二人のことを「人懐っこい郁達夫さん。蘭の話聞かせてくれた魯迅のおじさん<sup>13)</sup>」と親しみを込めて呼んでいる。実際、息子森乾も、魯迅がかつて「娘のように」三千代を可愛がっていたと語ったことがある<sup>14)</sup>。『東方の詩』はアジアからヨーロッパへの旅を記録した詩集であり、パリ滞在中一度フランス語に翻訳され出版されたが、日本語版も三千代帰国後の1934年に出版された。その時、三千代は魯迅に一冊贈っている。1934年3月12日に、魯迅は日記に「昼過ぎ、『東方の詩』一冊を受けとる。著者の森女史より寄贈されたもの」と記している。3月17日の日記には「森三千代女史に手紙、寄贈書の礼」という言葉も見られる。『魯迅全集』にも収められていないこの返信が森家により近年発表された<sup>15)</sup>。全文は次のようである。

拝啓一昨日御頒与ノ『東方の詩』ヲイタマイテ御蔭様デスワッテ色々ナ處ニ旅行スルコトガ出来マシタ。厚ク御禮ヲ申シ上ゲマス。

蘭ノ話ト云ヘバ料理屋ニ集マツタ有様モアリアリト目ノ前ニ浮出シマス。併シ今上海ハアノトキト大ニ変ッテドウモサビシクテタマリマセン。

魯迅 上

森三千代女士几下

三月十七日<sup>16)</sup>

ところで、二人のいう「蘭の話」とはいったい何だろうか。晩年の光晴がテープに吹き込んだ独り語りの一節、「郁達夫と魯迅」の冒頭にその答えが含まれている。

彼(魯迅)は新しい文士だったけれども、ぼくより年は上だったと思うな。非常に古いことを知っているからおもしろかったの。

たとえば中国の街の構造としては、まず大きな城壁をめぐるせていて、戦争があると、城外で働いてる百姓なんかがみんなその中に逃げこむんですよ。だから考え方によっちゃ民主主義なんだ。日本は自分たちだけ城にこもって百姓はどっかよそに逃げていくでしょ。そういうところが違うところだな。まあ、そうした城壁の前に蘭作りが、朝になると、自分で作った蘭をおいて売らんだとか、魯迅はそういう話をしましたよ<sup>17)</sup>。

森三千代がいつ魯迅と知り合ったのかは不明であるが、1929年1月26日の『魯迅日記』には、「昼、達夫より招かれ陶楽春で飲む。広平とともに行く。前田河、秋田、金子夫妻、語堂夫妻、達夫、映霞、計十人同席す」と記録されている。この頃上海を訪れていた文学者



前田河広一郎を囲む会席だったと思われるが、蘭の話はそこで出たのだろうか。前田河がある会合で、魯迅や郁達夫と激しく論争し、郁達夫はこぶしで机を叩いて、血まで流したこともあったが<sup>18)</sup>、この日の会食は夫婦同伴のところも数組あって家庭的で、いとも和やかな雰囲気だったのではないか。

ところで、五日後の31日の『魯迅日記』には、また「達夫来る。『森三千代詩集』一冊を渡され、ちまき十個を贈られる」とある。これは光晴が島津四十起に頼んで、印刷出版させた森三千代詩集、『ムキシュキン公爵と雀』である。現在国会図書館に所蔵されているこの詩集の裏表紙には、印刷日と発行日（「1929年1月21日」と「1929年1月23日」）、および「著者 上海北四川路余慶坊一二三号 森三千代」などが明記されている。つまり三千代は詩集が出版されて一週間後、郁達夫の手を借りて魯迅に贈ったのである。詩集の表紙は三千代の恋人が描いた「あやつり人形の馬の三匹いる絵」である。子供の稚拙さを強調するものだったと思われるが、光晴のいう「私のもちあわせていない新しい時代感情のあふれたものであった<sup>19)</sup>」という言葉はどうも皮肉のようである。詩集の内容は、作者のいう「すべて未だ故国にある時のものばかり<sup>20)</sup>」であり、主に恋人への愛情や子供への思いが綴られている。たとえば「坊や」と題する作品は次のようである。

坊やの書いていた兵隊さんは  
帽子が横っちょになってるのね。

（中略）

坊やの乗ったお船はどんなに大きかったこと？  
そして、お船は揺れたこと？

（中略）

坊やはいくつと聞かれた時に、忘れずに  
『みっちゅ』と言えたでしょうか。

きょう街を歩いてみると、  
どの子どもどの子ども坊やによく似ているようで  
ほんとうはちっとも似てはいないのです。

ひとりで家に帰ってみると、  
坊やの書いた兵隊さんが  
誰よりも坊やによく似て見えるのよ。

私は、障子の棧のキャラメルを  
そっとつまみ上げて、またもとの通りに置きました<sup>21)</sup>。

これはおそらく1928年春、光晴が三千代を東京に残したまま、息子乾を長崎の三千代の実家に預け、上海へ行く時のことであろう。三歳のわが子と離れて、心に大きな穴が開いた母親の悲しさ、寂しさが切ない。そして今はわが子を故郷に残したまま、遙か異国へ旅出ることになり、三千代がこの旧作を選んだときの心情を考えると、母親の嗚咽のような「坊や」という連呼が、紙面を通して聞こえてくるように思えてならない。そのうえ乾が描いた「兵隊さん」(ただ雑な線や円にしか見えないが)の挿絵も加えられ、母親の思いが一層痛々しい。しかしそれから再びわが子とその胸に抱くまで、四年もの年月を耐えなければならないとは、当の三千代も想像できなかっただろう。

このような寂しい気持を抱えながら異国の地で日々を過ごしている三千代にとって、いつも温かく接してくれる「魯迅のおじさん」の存在は、彼女に家庭的な和みを与え、心の支えになっていたのではないだろうか。そしてたとえ「女流」ものでも、魯迅がきっと認めてくれるという確信があったからこそ、五年後にもわざわざ日本から詩集を魯迅に贈ったのであろう。そのときすぐに返事をくれた魯迅の手紙を読んだ三千代の気持ちは、容易に想像がつくだろう。

実際、魯迅が「スワッテ色々ナ處ニ旅行スルコトガ出来マシタ」といったように、『東方の詩』は三千代が旅した上海、武漢から、東南アジア、そしてパリの風景が綴られた作品集であり、若き女性詩人の初々しさが感じられ、秀作も少なくない。一例を挙げよう。

## 上 海

<sup>22)</sup>  
アーチュウとんす  
炎のような抗州緞子に

にぎり拳のような女の一方の足が包まれている。

むかつくように臭い。

——艶のうせたもの、羞かしいもの。

踊ったことのない足だ。そうではない。

人に荷われて宙に揺れてるだけの足だった。

古い商品に斬新な商標を貼る上海<sup>シャンハイ</sup>の商人は、

それを、「福州の木茸」とつけた。

その店先に立止って、  
女政客は、拳をあげて罵った。  
長い煙管を杖についた老人は  
一日、あきもしないで、それを眺めていた。

だが、苦力や、<sup>サンボツオ</sup>黄靴車や、乞食は  
あえぎながら、よろめきながら、  
針のような細い眼で睨まえて、  
食わない胃の腑が、でんぐり返った。  
——あれあ、甘まそうだ！<sup>23)</sup>

冒頭で述べたように、三千代は上海時代にこつこつとエッセイや詩を日記帳に書き溜めていたが、この作品もその中の一つであろう。杭州緞子に包まれた女性の纏足と、「上海の商人」、「福州の木茸」、「拳をあげて罵った」「女政客」、「長い煙管を杖についた老人」、それに苦力、車夫、乞食などを取り出してきて、やや観念的でありながらも、面白い上海風景の一コマを織り出している。同じ女性の足をモチーフにした作品は『女人芸術』に掲載された「跳舞的上海」であるが、「纏足」とは正反対の、ダンスをしているモダン女性の足である。

花の雪が降る。  
虹色の金柱のまわりを  
金の刺繍した支那靴がおどる<sup>24)</sup>。

しかしこちら画面はすぐに「おどる」苦力と車夫の足に移され、作者は「歓楽の熱狂」と「苦しみの熱狂」の対照から「DANCE」の意義を見出そうとする。プロレタリア文学という時代の潮流を熱心に勉強している三千代らしい作品である。

## Ⅱ 「病薔薇」と白薇

ここで注目したいのは、『東方の詩』『後記』に見られる、次のような記述である。

上海生活の一ばん印象の深かったある夕。女子高等師範時代の級友、黄白薇姉妹と、三人で、新雅料亭の卓をかこんで、恋愛論をたたかわせたこと。この支那の女流文士の大胆さは私を顔負けさせました<sup>25)</sup>。

一九二〇年代の上海はアジア有数の国際都市であり、文化、経済の中心地だったため、自由な空気が漂っていた。前述した1月26日の席上でも、顔をあわせた四組のカップルのうち、魯迅と許広平、郁達夫と王映霞の二組は共に親が決めた「封建的な」婚姻関係を無視し、自由恋愛で結ばれていた。日本では大胆自由な女性と見られていたはずの三千代でさえ、白薇、王映霞、許広平などの中国人女性の自由奔放な生き方はまぶしく見えただろう。

ところで、「三人で、新雅料亭の卓をかこんで、恋愛論をたたかわせた」場面を再現したような短編小説を、森三千代は1946年に発表した。「新公園に、木蓮や連翹の花が咲きそろいはじめた」という一文で始まる「病薔薇」は、余慶坊に住む主人公「桂龍子」と「中国女流文壇の鏘鏘」「朱薔薇」との交友を描いている。龍子の友人「郭周夫<sup>26)</sup>」に連れられて重病の朱を訪ねたこと、帰り道に郭宅で麻雀をやりながら、日本留学中の朱姉妹との付き合いを回想したこと、数日後、朱が病院から帰る途中、恋人と一緒に龍子を訪ねて来たことなどが書かれている<sup>27)</sup>。最後は一ヵ月後にすっかり元気になった朱薔薇が、杭州からわざわざ来た妹範美と一緒に龍子に会いに来て、三人が近所の「滬江春」という料亭で食卓を囲みながら、留学中の話や、恋愛論などについて話し込む場面が描かれている。

ところで黄白薇(作品中は「朱薔薇」)とはいかなる人物だったろうか。

白薇(1894-1987)、本名黄彰、別名黄素如と言い、湖南省生まれの女性作家である。長沙第一女子師範などで学んだ。結婚後夫や姑の虐待に耐えられず、故郷から逃げ出し、上海、そして日本へ渡った。下女などをしながら、日本語の勉強をし、1923年東京女子高等師範に入学した。翌年福建省出身、東京高等師範学校在学中の楊騷(1900-1957)に出会い、激しく愛し合ったが、楊騷は初恋の人を忘れられず、黙って彼女の元から姿を消した。白薇も1926年冬に帰国し、1927年春に武昌へ行き、国民政府総政治部で日本語の翻訳の仕事や武昌中山大学の講師を務め、熱心に国民革命に参加した。大革命の後に彼女は上海に移り、執筆活動を始めた。1928年に詩劇「琳麗」を発表し、好評を得た。その後「幽霊の塔を打ち壊して」と題された戯曲は、魯迅が編集した雑誌『奔流』創刊号に掲載

され、「女性作家」として一躍有名になった。

ところで1927年シンガポールから帰国した楊騷も上海に来て、二人は再会し、再び同居した。そしてともに魯迅から文学上の指導や経済的援助を受けながら、文学活動に没頭した<sup>28)</sup>。森三千代と再会したのはちょうどこの頃である。

白薇の経歴を見ると、どこか三千代と似通うところがある。ともに美貌の才媛で、自由奔放に愛情を求め、そして左翼的でもあった。このような共通点があったからだろうか、三千代は白薇に対してきわめて好意的である。小説の中で龍子の「楊さんはあなたの恋人、でしょう？」という問いに、「朱薔薇」は「分かりません。でも、楊さんと握手する時、しらずしらずのあいだに、二人の握っている手が固くなります<sup>29)</sup>」と答えた場面がある。一緒にいたはずの、しかし小説中では「削除」された光晴も、この言葉を聞いたが、彼はそれをむしろ中国人が「人間的におくれている」のだと見ている<sup>30)</sup>。しかし三千代にはこの「切れがちな低い声で言ったその言葉は、軽薄にひびかないで、しんみりときこえ」、「まじりけのない愛情のためだろう」と思われた。

多くの出来心の愛欲の生活から、そればかりは真実のものとして、まぎらせまいとしているらしい薔薇の切ない心情をおしはかると、龍子は哀しくなってきた。龍子が感じとった行末のおぼつかなさを、薔薇自身も十分おそれているのにちがいがなかった。その気持が、薔薇の身邊にただよう憂愁となって胸をうってくるのだった<sup>31)</sup>。

三千代が敏感に感じ取ったように、白薇と楊騷との恋は決して穏やかなものではなかった。性格の違い、忘れられない初恋、さらに楊騷が原因の重い性病、二人の争いは絶えなかった。そしてこんな時こそ、同じく恋に悩まされている三千代と白薇との間に、口には出さずとも心の通い合うことがあっただろう。ところで、中華料理屋の食卓を囲んでの会話は、まさしく日中両国の新しい女性の恋愛論になっている。三人は各自の恋人の話をして、それぞれの理想の愛の形について披露している。「恋愛のにがいところだけが、ほんとうにあまいこと」という姉に、妹の方はより率直に「一生を捧げるような恋愛を考えています」と言い出す。そして自分はこれからパリへ恋人に会いに行くと言った龍子をロマンチストだと批評した姉妹に、

中国人はリアリストだといわれているけれども、薔薇にしろ、範美にしろ、自分よりもっとロマンチストだといって、龍子はやりかえした。なぜならば、薔薇は、彼女自身の夢を追求めるために病薔薇となるのではないか。範美もまた、夢が大きすぎるために、誰一人気に入った相手

に出会わないではないかと言った<sup>32)</sup>。

かつて谷崎潤一郎は、田漢と郭沫若と深夜まで中国の政治について、つっ込んだ会話を交わしたが、日中の女性文化人がこのように恋人や恋愛観などの内緒話を遠慮なく語り合っている場面を読むと、感動すら覚える。そこには女性同士の友情があって、国という壁がない。この時代の日中文化人の間に、このような語り合いがそうそうあったとは思えない。龍子もこの異国の土地で「思いもかけぬ三人の旧知が落ち合うようになった運命の計らい」を不思議に思うと同時に、「たのしくもあった」と感じた<sup>33)</sup>。

一方、かつて同級生だった白薇が中国の文壇に「勝ち得た地位」と、「日本の文壇ではまだかけ出しとまでもゆかない」自分とを思わず比較し、刺激される三千代もいた。彼女は「いったん捨てたつもりの文学的野心と、空費している時間へのあせりで、身のおきどころもなくしている<sup>34)</sup>」思いだった。

すでに述べたように、一九二〇年代の上海は、自由恋愛を求める若者が集まる場であったが、同時に女性文学を生み出す中心的な場所ともなっていた。白薇のほか、丁玲、廬隱、馮沅君、蘇雪林など、後に中国現代文学史上名を残す数々の女性作家が、この頃すでに上海で文筆活動を始め、頭角を現したのである。このような環境が、小さい頃から作家志望の森三千代に大きな刺激を与えたのは言うまでもないだろう。その結果として、日記帳に書きとめられた初々しい「習作」は、やがて数々の「秀作」を生み出すことになるわけで、上海で過した日々は彼女にとって、決して「空費している時間」ではなかったと言える。

三千代が上海を去ってから数年後、思いのすれ違いと貧困と病気に苦しめられた白薇と楊騷は、二人のこれまでの恋文を『昨夜』というタイトルで出版し、「二人の愛情を金で売る」ことによって、関係を清算することにした。楊騷との恋の苦しみを、さらに長編小説『悲劇生涯』を通して赤裸々に告白した白薇は、時代の新しい女性として認められる一方、様々な誤解や中傷も受けた。白薇はその後、数奇な運命を辿り、長く生きたものの世に忘れ去られ、貧困のままこの世を去った。異国の土地に、これほど自分を思ってくれた知己がいたとも知らずに。

以上、森三千代の魯迅と白薇との交友を、三千代の作品を通してみてきた。三千代は初回の上海訪問を通して、フランス人の応対と似ている「支那らしい礼譲と和楽」、「高貴な器物をあつかうような注意と物柔らかさでお互いの心をあつか<sup>35)</sup>」う中国知識人のマナーのよさに強く感銘を受けていた。しかし二度目の滞在で得たさらなる交流は彼



女にとって、もはや単なる日中文学者の楽しい付き合いの範囲にとどまらず、大きな意味を持つことになった。魯迅と白薇との、国の壁を超えた付き合いは、恋の悩み、家庭の危機、そして子供への思いを抱えながら、異国の土地で日々を過ごした三千代にとって、大きな心の支えになったに違いない。また光晴とは異なり、時代の潮流を敏感に感じ取り、プロレタリア文学を熱心に勉強していた三千代だったからこそ、左翼的な中国文化人との連帯感もあったのではないだろうか<sup>36)</sup>。さらに上海の女性文学の勃興に刺激を受け、一度諦めかけた文学への情熱も取り戻すことができた。このように、上海を訪ねた数少ない日本人女性文学者として、森三千代は独自の視点を持ちながら、貴重な体験を経験しえたのである。

一方、本論では光晴と中国文化人との交流について詳しく考察することができないが、少なくとも魯迅、郁達夫、または田漢、歐陽予倩らとの交流が、『どくろ杯』のみならず、一回目の訪滬直後に書かれた「上海より」、「南支の芸術界」などにも見ることができる。これらの交流活動は光晴にとっても大きな意味を持った。『こがね蟲』で華やかな文壇デビューを果たしたものの、関東大震災と文壇潮流の変化により出鼻を挫かれ、「文学的生命も、栄養分を」失い、「八方ふさがり」状態の光晴が、魯迅を中心とした中国文壇の中核と日常的に付き合えたということは、彼の心身を癒す重要な栄養源になっただろう。三千代も証言するように、夫婦には他の土地では「中国でお友たちになった人たちみたいなお友たちがなかった<sup>37)</sup>」からである。光晴は上海で「詩も、画もかく」日本の青年「画家兼詩人」として認められ、魯迅らを通して日本文壇の風雲児たちと接することも出来た。これは文人金子光晴にとって、五年に渡る長旅のなかでの得難い体験であり、その上海生活の重要な価値を持つ出来事と言えよう。光晴自らも様々な中国文化人との交流を回想し、「金は一文もない僕にも、あのころの上海の思い出はたのしかった<sup>38)</sup>」と語っている。

しかし一九二〇年代の上海で繰り広げられた日中文化人の交歓は、やがて日中戦争という残酷な現実の壁にぶつかり、その真諦を問われることになる。そこには戦火を越える友情もあれば、反目と断絶も現れることになった<sup>34)</sup>。金子夫婦にも厳しい試練が待っていた。光晴が「反戦詩人」として戦う一方、三千代はこの「病薔薇」を『桃源』の創刊号に寄稿することによって、一つの明瞭な答えを出したのである。なぜなら、終戦後わずか一年で創刊されたこの小さな同人誌は、「中国の寛容さと日本の反省とが融合すること<sup>40)</sup>」を主旨とし、魯迅特集なども出す中国文化研究の専門誌だったからである。こうしてみると、上海での心を伴う交流は、確実に実を結んだといえよう。

ところで、「病薔薇」の前に、森三千代はすでに上海体験をモチーフにした短編小説を書いている。1940年8月『新潮』に発表された「通り雨」は、金子夫婦の上海生活を、特に秋田義一との関係を中心に描いたものであるが、興味深いことに、これは光晴の『どくろ杯』の下地と見ることのできる、重要な作品である。

### Ⅲ 「通り雨」に描かれた「上海ゴロ」

金子光晴は晩年『どくろ杯』や『ねむれ巴里』を書くまで、すでに「東京＝パリだるま旅」(1954)、「詩人」(1957)、「支那浪人の頃」(1963)などを通して、何度もこの放浪生活を回顧していた。しかしあまり知られていないことだが、それ以前に妻の森三千代はすでにこの「ふり返り作業」を行っていたのである。日本に帰り、『東方の詩』を出版してから、三千代は小説家として歩み出した。そのとき自分の小説の材料にしたのが、つねにこの長旅であった。1940年『巴里の宿』、「通り雨」、1941年『をんな旅』、1946年「病薔薇」、1947年『巴里アポロ座』のように、上海またはパリ生活を記録した作品が次々と生れてくる。そこにはいわゆる「上海ゴロ」や「パリゴロ」の生き様が活写されていると同時に、男に頼って生きていた女が、徐々に自立していく姿が光彩を放つ。光晴や森乾がかつて証言したように、三千代の早期作品は、しばしば光晴と相談しながら創り上げられたそうだが<sup>41)</sup>、実際、「通り雨」と『どくろ杯』、『巴里アポロ座』と『ねむれ巴里』の間には、確かなつながりが見られており、三千代の作品は、光晴の作品の下地になっているともいえるだろう<sup>42)</sup>。小論の後半では主に短編小説「通り雨」を通して、森三千代が描いた「上海ゴロ」を見てみたい。

#### 1)「永安里」(余慶坊)の人々

金子夫婦の上海での宿は二回とも同じ場所、北四川路に位置する余慶坊一二三番地石丸りか宅であるが、「通り雨」ではその名を「永安里」とつけている。

私たち三人(出迎えの宇留河泰呂を含む——筆者注)は、日本人のたまりの虹口、文路をぬけて、北四川路に出ると、北へ、北へ、車を走らせた。日本書店の内山完造さんの店のすじむかいの  
イイチンバン  
余慶坊という一割の入り口で、車を下りた。二筋の路地を、表と裏がむかいあって、支那風な漆喰の二階建長屋がつづいている。入り口には、雑貨屋と、熱湯を沸して槽で売る店とが並んでいた。大きなトランクを交代で曳きずって、路地に入ってゆくと、おなじような頑丈な鉄門を閉じた家の四五軒目に、石丸りかという標札が出ていた。数年前はじめて二人が来滬したとき二階を借りた老婆の家であった。鉄錠を二つたたくと、甲高い老婆の声が「へーい。どなたでしゅ」

と、まぎれもない長崎なまりで返ってきた<sup>43)</sup>。

面白いことに、夫婦が暮らした部屋も、あたかも彼らの二度の旅の違いを象徴するかのよう、それぞれの滞在で全く異なる。最初は旅費も満ち足り、谷崎潤一郎から七つの紹介状を渡され、文字どおり楽しい新婚旅行であり、住む場所も二階の三十畳の大部屋だった。

あかるい菜畑のようなたたみ部屋で、家具一つない部屋のなかを、新婦<sup>ママ</sup>早々の私たちは、片方のすみからむこうの壁へころがり競争をしてあそんだものだ。そのときは春四月の上海はそこぬけなあかるさで、ぶろんぶろん唇を鳴らしながら吹いている風が、花のにおいでいっぱいだった<sup>44)</sup>。

しかし二度目ではこの大部屋に先客がいて、裏の小部屋に泊まることになった。真冬でも暖房設備のない上海の建物の、しかも裏小屋の陰湿さと寒気は、あたかも冷えきった夫婦の関係を象徴しているように、骨も凍るような思いをさせた。三千代はすぐマラリアにかかり、一階に住んでいる大家は見兼ねて、自分が畳のうえに移り、前に据えたダブルベッドを光晴夫婦に譲った。その部屋の様子は「通り雨」に詳しい。

表側の大部屋には、仕切の破目寄りに十畳も敷ける床をつくって、古畳を敷並べ、婆さん自身が寝起していた。それでも板床は相当ひろく、英国製の大型なダブルベッドが据えつけてあり、葉飾りの彫刻のある性のよい壁鏡や、洋服戸棚がならべてある<sup>45)</sup>。

上海の日本人居留民に関する研究は近年盛んに行われ、その実態が徐々に明らかになってきている。周知のように、アヘン戦争によって開港されて以来、上海は欧米列強が統治する租界に化されたのみならず、二十世紀に入ると、満州と並んで、日本の中国進出の二大拠点の一つにもなった。第一次世界大戦を機に、多くの日本企業の上海進出に伴って日本人居留民の数は飛躍的に増加し、二十年代後半になると、すでに外国人居留民の中ではイギリスを抜いて一位となり、二万人近くも上っていた。彼らはほとんど虹口あたりの「日本租界」に集中し、その界限では、建物の内部から町の景観まですでに長崎の一角を髣髴させる日本人街と化していた。中国式の家屋は畳などをいれられ日本風に改造され、街には日本の商店が軒を連ね、食品や日常用品も連絡船を通して長崎から運ばれてきた。日本人の学校、寺院、そして神社までが作られ、現地の日本人はまるで日本で暮らしているような錯覚さえ覚えた<sup>46)</sup>。現に三千代も、大家の老婆に向かって、

「お婆さんのところのほうがいぶんのほんとうの家のような気がして<sup>47)</sup>」とまで言っている。

しかしながら文学作品の中で、上海居留民の日常を活写するものはまだ少なく、この点においては、金子光晴と森三千代の作品が双璧といえよう。光晴が書いた「熱湯を沸して槽で売る店」や、かつて上海近辺都市の朝の風物詩ともいえるモウドン掃除の様子はいまや知る人も少なくなったのだろう<sup>48)</sup>。

『どくろ杯』には余慶坊を出入りする人々、例えば大家の「唐辛子婆」、売人の「鼻ぽん助」、画家友達の「秋田義一」が登場するが、面白いことに、これらの原型はすべて「通り雨」の中で完成されている。しかも人物の活写においては、光晴よりも、小説家森三千代の手腕がさえていて興味深い。いくつか例を挙げよう。

鼻ぽんは猪首で背が低く、鼻ぽんという名の通り、ぽんとなにかで頬のまんなかへ叩きつぶしたような鼻をしていた。へ、へ、へと頭をさげ、逃げ場をうしなったようにうろろうるかともいてみると、時折、急にひらき直って悪の素養らしいものをちらつかせるのであったが、相手が手剛いとみてとると、適宜に持前の陰気で、めそめそした態度にかえり、見えすいた、いけづうづうしさの一てんばりで相手をくどきおとしにかかるのだった。

上海ではまだ、冬とあまり変らぬ三月四月の気候に、わらわらお婆は、夫の形見だという、長すぎる黄羅紗のガウン一枚でいた。それでも猶のぼせ上って、胸をはだけ、額に粒々の汗をうかせていた。「寝つかれませえ。」と、夜通し、敷布団のうへにきょろんと坐っていることがあった。

・・・名も田という支那人になりすまし、茄子色紋織の支那服を着て、猫脊で、度の強そうな近眼鏡をかけた秋山という男が、なにか一癖ある人物のように印象付けられた。(中略)相手の言うことがよく聞き取れない時、秋山は、じっと耳を傾けて待っている。その眼鏡の顔は、まるで、止まり木にとまった梟そっくりで、なにごとか悲しんでいるようにも見え、すこしとぼけているようにも見えた<sup>49)</sup>。

## 2) 秋田という男

秋田義一は光晴が上海の旅を語るたびに登場する人物である。光晴は、東京ですでに知り合っていたこの画家である友人の、上海滞在中のマーネジャー役を引き受け、秋田の「一夜漬けの油絵の行商の音取り<sup>50)</sup>」のような仕事をせさせとやっていたようだ。「通り雨」でも、秋田が「実業家や政治家などから小遣いをもらい、時には、描きなぐりの油絵

を持って行ってそれを売りつけたりして、無理な世渡りをする人間と見られている<sup>51)</sup>というふうに描かれている。

ところが、光晴は秋田を語るとき、必ず持ち出すエピソードがある。つまり日本の有力者の添書きを持って「当時上海市長であった張群」から金を引き出そうと上海南京へ張を追い求める云々である。ところが、「通り雨」ではその張群が「変り種の実業家で、支那通の高倉氏」になっている。もっとも張群の上海市長就任は秋田が上海に来てから数ヶ月も後の1929年4月1日のことだった<sup>52)</sup>。おそらく滞在中新市長就任という出来事に出遇った光晴は、面白がってこの逸話を作ったのであろう。

今橋映子氏が『ねむれ巴里』に対し、その「散文詩」的な文体と濃厚な「小説」の要素を指摘しているが<sup>53)</sup>、『どくろ杯』にも同様な傾向が見られ、光晴の語りを鵜呑みにするのは危険である。余慶坊の人々の多くは、その原型が「小説人物」(金子夫婦が「勝子」と「草刈」、秋田義一も「秋田龍一」になる)だったことが証明しているように、光晴の描いた「秋田義一」も、実在の人物というより、「上海にいる日本人画家」の一つの典型であるといえよう。ただ注意したいのは、この典型のもとというべき「秋田龍一」の上には、「上海」のみならず、「パリ」も投影されたということである。

すでに述べたように、上海の日本人居留民は、事実上植民地色の強い「日本租界」というかなり優遇された環境の中に生活していた。『どくろ杯』に描かれた秋田の売画も、相手が日本企業の支配人であったり、蘇州の日本領事であったりして、しかも気楽で、友達のような穏やかな雰囲気で行われている。しかし同じ行為がパリの光晴や出島の身に起きると、それは屈辱と傷心に満ちたものになる。この差違こそが、上海とパリにおける日本人の立場をこれ以上なく物語っているのではないだろうか。

あまり知られていないが、魯迅もかつて秋田義一の絵を買ったことがあり、その経緯は魯迅日記に詳しい。1929年9月27日、五十歳近い魯迅に長男海嬰が生まれ、その喜びもひとしおだった。日記中妻の入院から子供の命名までの経過が詳しく記されているが、この「非常時期」になんと秋田義一の名もしばしば現われる。28日には「秋田義一來るが、会わず」。10月1日「昼過ぎ、秋田義一來る。油絵の静物画一枚を贈られ、五元を貸す」というふうに。そして12日にはとうとう「昼過ぎ、秋田義一來る。海嬰のために絵を描いてくれる。十五元を貸す」ことになる。「購入」ではなく、「貸す」(原文は「假以」)というのは、この金額はただの前金であり、画の値段ではないことを意味しているのだろう。ちなみに「海嬰生後十六日像」と題する、ふっくらとした海嬰の寝顔が描かれたこの油絵は、今も上海魯迅故居の、二階にある夫婦寝室の北壁に掛けてある。秋田の売り込みは少々強引とはいえ、その絵が長年魯迅夫婦の寝室にかけられたことから見ても、この日



本青年が当時の上海である程度認められた画家であり、必ずしも「一夜漬けの油絵の行商」ではないことが分かる。

実際、一九二〇年代の上海は文学のみならず、中国現代美術の中心地でもあった。フランス帰りで、後に中国現代美術の巨匠となる劉海粟、徐悲鴻、また日本で学んだ陳抱一などもこの頃上海で活動していた。上海では各種の芸術学校や芸術団体が群立し、美術関連の雑誌も多く創刊されている。1929年4月には、教育部主催の第一回全国美術展覧会も開かれている。幼少期から美術に興味を持っていた魯迅も中国現代美術の発展に大きく寄与していた。彼は前年の12月に、柔石ら文学青年と一緒に「朝花社」を創立し、外国の版画を中国に紹介しようと尽力している。魯迅が3月31日光晴の上海百景展覧会に、柔石、崔真吾、許広平ら「朝花社」メンバーを連れて来たことには、この見学を「朝花社」活動の一環にしたいという思いが込められていたのだろう。実際、一ヵ月後も、魯迅は再び柔石と許広平らを連れてパン・ウル(宇留河泰呂)個人絵画展覧会を見に行き、その場で油絵「逆立ちする娘」を三十元で買った。「とき色の衣服を着た女芸人が片手で倒立し、頭上に皿を載せているところをいきいきと描いた<sup>54)</sup>」この絵も、同じ上海魯迅故居の、三階の海嬰用寢室の東壁に掛けられている<sup>55)</sup>。魯迅が絵を買ったこの三人の日本人画家、金子光晴、秋田義一、宇留河泰呂は、奇しくも親友同士である。魯迅の行動には、絵の価値を認めたということ以外に、外国の青年画家を援助しようとする好意もあったと思われる。これらの事実から見ても、当時の上海では西洋美術がまだ発展の途上にあり、日本人画家が比較的に優遇された事情が分かる。これはつねに世界中からおびたしい画家が集まっていたパリとは、同一に語ってはならないだろうし、秋田という人物も、光晴も、実はれっきとした画家として認められており、「上海ゴロ」の類には入れられないだろう。

しかし、「通り雨」で描かれた画売りの生活は、苦勞に満ちている。小説の中で、「誰が、画の行商に、苦勞して支那くんだりをはつつき歩くものか。……大陸になすべき抱負を持っているからじゃないか」と熱く語っている秋田が、勝子の目には、すでに「無能で、みせかけだけで、なにかありそうにみえる時勢論は、時代おくれで非実用的で、そのうえ病人で、取柄というものはどこにもない」哀れな男としてしか映らなくなる<sup>56)</sup>。これでは上海にいる秋田義一という人物は、むしろパリにいる出島か光晴(『巴里アポロ座』には「柴崎」と「友田」)に化しているようにみえる<sup>57)</sup>。浦東にある日本企業の支配人に画を売りつけようとする二人の男に向かって、勝子は叫ぶ。

……まるで野良犬のようにはつつき歩いて、乞食のように人からお金をもらって歩いて。そんな、そんな生活、生活じゃないわ<sup>58)</sup>。



### 3) 奇妙な三角関係

面白いことに、光晴も三千代も作品中、夫婦と秋田との同居を描いている。「通り雨」には一階の大部屋で勝子夫婦が「イギリス製の大型」ダブルベッドを使い、大家がその前の畳で寝起きをし、秋田が「畳の上に座布団を並べ敷き、うすい旅行用毛布をかぶって支那服のままでごろね」するというような、奇妙な同居生活が見られる<sup>59)</sup>。

『どくろ杯』の中に、重病の秋田を日本に帰国させるため、港へ見送った後の、光晴と秋田と三千代の関係を伺わせる興味深い一節が書かれている。

「君は、奴が好きになったじゃないか。どうも、そうらしいぜ」

彼女は、あわてて否定しようとしなくていいふりして茫然と闇のなかをみつめていた。私は、なぜ、彼のいるところでそのことを言わなかったかと後悔した。善良な日本人の彼は、どんなに身のおきどころもなくこまったか、それがみてやりたかったのだ。その困惑ぶりは二挺の人力車の私の車でなく彼の膝のうえに彼女を乗せたときの表情でよくわかっていた<sup>60)</sup>。

しかし「通り雨」では、この経緯がまるで異なる。

草刈の車がはじめ梶棒を上げて走り出し、勝子の車が아가ろうとすると、彼女は躓くように飛下りて、いま梶棒をあげかかった秋山の車に走りよって跳びのった。草刈の車がすでに走り出しているので、秋山は、彼の膝に腰かけた勝子の心を判断するひまもなく、そのまま先へいそがせねばならなかった。(中略)

勝子がふりむくと、いくらのもでも酔わない、やや土色に蒼褪めた顔を正面にむけ、秋山は、勝子の断髪のうしろ髪がうるさく頬にさわるのをじっとこらえたまま、一分も、表情も姿もくづすまいと闘っているのがわかった。(中略)

先に車を降りた草刈が、駐車場の切符売場の前で、ゆかんだ笑顔をうかべて二人乗りの車の近づくのをみていた<sup>61)</sup>。

まるで映画のワンシーンのようなこの場面は、実に同床異夢の夫婦の危機を絶妙に描き出している。「じぶんのおんなという切実感がそのときほどうすれ」た光晴に対して、三千代の取ったこの挑発行為は、おそらく光晴が感じたように、「ただ大きく男というものの範疇のなかにじぶんもいるにすぎないとおもわれたこと<sup>62)</sup>」ではなく、むしろ逆にその「男というものの範疇」を突き破ろうとしたのではないか。

『どくろ杯』ではその後宿に帰った時、三千代の恋人からの手紙が届いているのが発見

され、光晴が三千代の望んでいる詩集出版を手助けするという、一つの「物語」が完結されているように見えるが、しかしすでに分かっているように、詩集の出版はその数ヶ月以前のことであった。光晴は、女も男の欲望と同じで別な男が好きなことがありうると、島津四十そして自分を説得し続けながら、内面は「よそに恋人をもってその方に心をあずけている女性ほど、測り知れざる宝石の光輝<sup>かがやき</sup>と刃物のような閃めきでこころを割るものはない<sup>63)</sup>」と嫉妬に苦しんでいる。この苦しみは時折三千代に対する「剽軽な」行動を取らせたこともあり<sup>64)</sup>、また秋田に対する三千代の挑発がこういう光晴へのささやかな復讐であるとも考えられる。しかしこのときの三千代にとっては、もはや男よりも、もっと魅力的な世界が目の前に広がりつつあった。

#### 4) 上海という「西洋」

光晴の『どくろ杯』と三千代の「通り雨」とを読み比べると、一つ興味深いことに気づく。それは「東洋のパリ」と呼ばれた上海の特徴ともいえる、共同租界に代表されたような「西洋」が、『どくろ杯』にはなく、「通り雨」にはあるということである。光晴は、上海にいる日本人を主役にし、時折魯迅、郁達夫のような「支那文人」、そして混沌として、意識的に「泥沼化」された「支那」を登場させたが、上海の「西洋」には触れていない。それはある意味で上海にいる日本人居留民の生活実態を如実に反映しているともいえる。なぜなら、彼らの多くは蘇州河の北側にできた「日本租界」で、日本式の生活を送り、日本人同士だけで付き合う、という閉塞的な状態に安住し、国際都市上海にいながらも、ガーデン・ブリッジの向こうの世界、つまり「西洋的な」世界とは殆ど断絶していたからである。それに加えて、『どくろ杯』の西洋無視の背後には、金子光晴の中国、日本、そして西洋に対する意識も見え隠れしているのではないか。すなわち、光晴にとっては、日本が西洋と相反しているのと同様に、「支那」と日本も、相反するものであった。初回の上海旅行中、中国文化人との交流に感動した光晴だが、日中戦争、共産党中国の成立、そしてまさに『どくろ杯』の執筆中に進行していた文化大革命を見ていく中で、様変わりした中国に対する心情も変り、賞賛より批判の要素が強まっていたことも事実である<sup>65)</sup>。要するに、光晴の世界では、西洋、中国、そして日本は、常に対峙している三つの角であり、その「三点」に対する探究と批判は、光晴が生涯を通して行い続けた作業である。従って、晩年の集大成となる大河自伝小説も、『どくろ杯』においては中国と日本、『ねむれ巴里』では日本と西洋という、それぞれの対峙に自然と焦点を当てることになったのではないだろうか。

それに対して、「通り雨」では実生活で日常的に行われた中国文人との交流が省かれ、秋田に同行して一ヶ月にも及んだ蘇州旅行も秋田一人の南京行きに変わり、いわば「支那

的」な風景が最小限に止められている。そこにはもっぱら日本人同士の日常か、あるいはその反対の「西洋」だけが存在する。もちろん作者は上海にいる西洋人や西洋的な暮らしを正面から描こうとしていない。しかし共同租界のシンボルともいえる「西洋的な」要素は、常に行間から顔を覗かせている。南京路にある百貨店のショー・ウィンドウ、ガーデン・ブリッジ、キャセイ・ホテル、バンドの建物、税関の時計台、新公園で運動している西洋人の女たち、ダンスホール、日本人ダンサーが住んでいる西洋式の部屋、などなど。そしてこの「西洋」こそ、勝子には何よりも魅惑的なものだった。

彼女は風貌も、気持ちも変化した。ながい髪もじぶんで切って断髪にし、その頃流行していたポップを、耳朶ののぞく位揃えた。水おしろいの白っぽい化粧を、ドーランやアイシャドウで、油絵のように浮上げることをおぼえた<sup>66)</sup>。

一九二〇年代の上海は、東洋一のモダン都市でもあった。当時の文芸総合雑誌『良友』に登場した上海女性のファッションは、今日から見ても時代遅れと思われないほどである。従って、「日本から穿いてきた横ばったい靴や、手縫の服、型の古い外套など、まだ誰も洋服など着こなせなかった当時の和製品を身につけていた」勝子が、大型百貨店林立の南京路あたりを歩く時、「じぶんの姿がひけ目でならなかった」と思うようになったのも当然といえば当然だろう。踵のへった靴一つ、新しく買い換える余裕のない勝子にとって、上海は誘惑が満ち溢れる街だったのだ。

だが、なんという新鮮な欲望だろう。及びもつかない豪奢が、ショー・ウィンドウの硝子の向うで移り変る。欲望は単なる欲望とはいえない。生きたいというのとおなじほど、女にとってはげしい欲望なのだ。誰かがあれを買ってゆくのだ。誰かが、それを着て、得々として、音楽会や、ダンス・パーティ<sup>リャンヤン</sup>に出かける。なぜじぶんは二十銭玉一枚に銅貨一枚<sup>ドンベ</sup>をもってお腹をへらして、苦力たちといっしょに、ガーデン・ブリッジのですりにもたれかかって、ぼんやりと濁った川面を眺めているのだ。人生の華やかな中心はいったい、どこにあるのだろう。なんというぼろぼろな自分の人生だろう。勝子は、みんな、それが、草刈などと連立ついるための貧乏くじとしかおもえなかった<sup>67)</sup>。

注目したいのは、ここの欲望とは、単に一人の女が贅沢な暮らしを手に入れようという単純なものではない。それは「音楽会や、ダンス・パーティ」に代表されるような「西洋的」な暮らし、いや西洋そのものに対する憧憬である。光晴は日本人一般のバリ憧憬に

批判的だったが、森三千代にとって、この憧憬は心から愛するわが子と恋人までも手放せるほど強いものだった<sup>68)</sup>。三千代には、上海はすでに「支那」ではなく、むしろ「西洋」そのもの、少なくともその一部となっていたのである。そして上海は、彼女を西洋と結びつける世界でもあった。光晴にとって「パリゆきは、さほど魅力がなかった<sup>69)</sup>」ものだったにしても、三千代にとっては、パリは未知の世界であり、「たのしいことがいっぱいある<sup>70)</sup>」はずの場所だった。しかしそれを手に入れるために、まず自分をパリまで連れて行く男に頼るしかなかった。

きょうこそは、今度こそは、と、彼等の小さな成功を待っているのは、孤独な、ながい時間であった。人に頼るのを捨てて、独りになり、職業をさがして身を立てるか、日本へかえて蒔直しに、生活力のある男と結婚して従順な妻の生活にはいるか、決心をさだめなければ、春という春がみんな羽叩き去ってしまいそうで、しきりにきょうは心があせるのであった<sup>71)</sup>。

そう思いつつも、異国の土地で、一人の女性が自立することの難しさは日本人ダンサーの口を借りて語られている。「自由で、おもしろそうで……」と勝子に羨ましがれた星子の言葉は切実だった。

違う。違う。風船が浮いてるような、こんな自由なんて、たよりなくて。たよりなくて。上海みたいなところで、ひとりぼっちで稼いで、一人ぼっちで生きていると、ときどき、滅茶々なことでもしなくてはいられなくなるのよ<sup>72)</sup>。

しかし期待していた男達という、秋田が病気により日本に帰ることになり、草刈は「上海暮らしが板についてきて、永安里の家の門口に、草刈意匠図案部と看板を出し、おなじ路地の日本人産婆の家の呼出電話番号を刷りこんだ名刺までもってくらしていた。そのうえ「欧羅巴旅行を志し、あらゆる艱苦を覚悟して上海へ渡ってきた当時と較べる」と、「精神がゆがみ、からだに力がなく、表情までがどこかおどおどして、狡猾なかげが宿り」、すっかり「別人のように変った」のである<sup>73)</sup>。

小説の末尾で、勝子は夫と別れて、スーツケースをもって家を出る。躊躇も不安もあったが、「やがて、その片足を鉄梯子にかけた」という小説を結ぶこの一句は、男に頼らず、自立する道、そしてパリへの道を踏み出そうとすることを意味しているのだろうか。実生活での金子夫婦の別れはパリで一年以上を過してから、ベルギーへ行く時のことになるが、森三千代の心の「家出」は、紛れもなくこの上海から始まったのである<sup>74)</sup>。そ

してこの行為は、後のパリ生活を描く長編小説、『巴里アポロ座』の冒頭にも現れることになる。

上海はこうして森三千代を新しい世界へと導いた。興味深いことに、三千代の「通り雨」は光晴の『どくろ杯』の原型を作り出したとはいえ、両者の中に漂っている空気は明らかに異なっている。あるいは、両者を合わせることによって、一九二〇年代の上海像が、より真実に近くなるかもしれない。

そして再度強調したいのは、「上海ゴロ」の暮らしは本来「パリゴロ」のそれと本質的に異なっている。上海の「日本租界」に住む日本人居留民は、中国を凌駕した「大日本帝国」という強力な後ろ盾に支えられ、精神的な優越感と経済的な優遇地位に恵まれていた。従って、たとえ上海とパリが同じく人種のるつぼであり、冒険家の楽園であっても、そこにいる日本人の地位の差異は歴然としている。同じく「一文無し」といっても、『ねむれ巴里』の光晴が「しないのは男娼だけだった」のに対し、『どくろ杯』の人々は、日々の食事に四苦八苦したり、肉体労働を強いられたりした痕跡が見られず、もちろん人種差別の屈辱を味わったこともない。「半歳近く、しごとらしいまともなことはなに一つしな」くても、「ひもじいおもいもせず、何とか生きのびていた<sup>75)</sup>」のである。そのうえ「いつも友達が集まってきていて、せまい室ではレコードをかけてダンスをやったり、飲んだり、食ったり、麻雀をやったりして夜なかまで遊びたわむれる生活<sup>76)</sup>」だった。実際、三千代もまさしく小説中の「龍子」が望んでいるように、イギリス人が開いているダンス教習所へ正式な社交ダンスを習いにいたり、頻繁に日中交歓のパーティに出席したりしていた。金子は上海を蛆虫にとっての糞尿のような「楽園」だったと揶揄しているが<sup>77)</sup>、少なくとも、上海は日本人にとって確かに「楽園」に違いなかった。三千代の「通り雨」が、『どくろ杯』と『ねむれ巴里』と同様に、社会の低層に潜む人々に焦点を当て、大都会の裏の顔をさらすことで優れた文学作品であることは間違いない。しかしすでに見てきたように、そこに描かれた主人公達の暮らしが、後のパリ生活とすりかえた面があって、必ずしも実態とはいえない。結局、金子夫婦にとって、半年の上海滞在は、「たのしい」思い出がいっぱい残り、決して「泥沼のどん底」暮らしではなかったのである。

## 終章、上海から

以上、主に森三千代の視点から金子夫婦の上海滞在を再考してきたが、そこから浮かんでくる実態は『どくろ杯』のみでは見えてこないものだった。まず注目したいのは、金子夫婦の上海行きは、単に二人の逃避行ではなく、そこには一九二〇年代の上海という時代がはっきりと反映されていたのである。われわれはそこから、上海という国際都市



の混沌と暗黒だけではなく、その自由な空気、モダンな生活様式、最新の文学美術の潮流などもじかに感じ取ることが出来る。それに加えて一九二〇年代の上海で繰り広げられていた日中文化人の交流活動、および上海における日本人居留民の生活実態もはっきりと浮き彫りになっている。しかし、『どくろ杯』や「通り雨」のような「自伝小説」のみを頼ってそういった実態をとらえようとするのは危険である。すでに述べたように、これらの小説自体は「上海ゴロ」を描き出す優れた文学作品に違いないが、しかしその中には後のバリ暮らしの要素も混在しているため、そこを見分ける必要がある。金子夫婦の上海を検証するには、夫婦の「創作」を含む「語り」がもちろん大事であるが、それに加えて日中両国の当事者の証言を参考にし、さらに時代背景をも視野に入れながら、丹念に追跡しなければならない。小論はこの作業のごく一部に過ぎず、細部を含む全体像を作り出すにはさらなる努力が必要となるだろう。

上海はまた金子夫婦にとっても重要な意義を持っている。すでに述べたように、上海という土地は文学者金子光晴と森三千代を作り出すのに、大きく寄与した。中国の文化人を介して、彼らは一般の旅行者が見過しがちな中国社会の内面をじっくり観察することができ、そのうえ中国人の考え方や生き方に触れるチャンスも与えられた。このことがこの文学者夫婦に多大な刺激を与え、多くの秀作を生み出すきっかけになったことも、上海を題材にした二人の作品をもって証明できるだろう。さらに、上海滞在は金子夫婦の中国観の形成にも大きな影響を与えた。「一億一心」の祖国を真正面に批判する光晴の姿、そして日中関係が悪化しつつある中に、白薇や魯迅を偲び、中国の男性に恋をし、十数年にわたって思いつづける三千代<sup>78)</sup>の心には、上海生活が大きく作用したのではないか。しかし光晴と三千代における中国を考える時、『どくろ杯』のみを頼りにしてはならない。丸山昇氏が指摘したように、四十年という年月が大きな変化をもたらし<sup>79)</sup>、光晴にとっての「上海」、また「中国」が大きく変化したことにも十分注意を払うべきであろう。

一方、上海は森三千代にとって、世界へ開眼させてくれた土地であり、彼女はまさにこの都市で自由の空気を吸い、また異国の人々との交流を通じ、自分と異なった生き方を知り、外観にとどまらない真の「脱胎」を試みようとする。男から自立し、一人の人間として歩みだすことは、三千代にとって、必ずしも上海で始まったとは言い切れないものの、しかし上海で芽生えたことは確かである。「通り雨」の「家出」という結末は、後の『巴里アポロ座』の冒頭につながっており、興味は尽きない。

さらに森三千代が上海時代、こつこつと日記帳に書き溜めたこれらの初々しい詩作が、後に高名の多産女流作家を生み出すきっかけになったのも事実であろう。と同時に、彼



女の作品と『どくろ杯』や『ねむれ巴里』との関連を見ても分かるように、光晴晩年の秀作には、小説家三千代と共同作業した痕跡も多く残っている。この夫婦はこれから生涯何度も別れを経験する仲になるが、しかし男と女としてだけでなく、文学創作に於いても、互いに影響し合い、共に成長していく姿はほほえましい。

要するに、金子光晴と森三千代にとって、上海は単なる放浪の旅の通過点ではなかった。魯迅をはじめ、多くの中国文化人に助けられ旅費を作ったこと自体、一つの象徴である。上海は、二人のこれからの長い旅、いや、長い人生においても、大切な糧を提供した場所だったのである。

## 註

- 1) 金子光晴『どくろ杯』、『金子光晴全集』第7巻、中央公論社、1975年、79頁。
- 2) 森三千代の上海関係の作品については、今まで殆ど言及されておらず、中には「跳舞的上海」や「病薔薇」など、その存在すら知られてないものもあった。未見の作品もあるかもしれないが、今度の調査を通して確認できたものだけを挙げると、同人誌『女人芸術』1929年4月号「跳舞的上海」、7月号「武装された蘇州」(エッセイ)、『をんな旅』(富士出版社、1941年)所収エッセイ「胡弓」、紀行文「長江を遡る」のほか、『東方の詩』(図書研究社、1934年)にもいくつかの詩作が収められている。三千代には未発表の上海日記も残っているが、日記の保存者によると、これは日記というより、詩と旅行記のための習作(堀本正路「森三千代・日記」、『こがね蟲』第1号、昭和62年)であり、従ってその内容の大半はすでに前述した作品として発表されたと考えてよいだろう。それに加えて、戦時中、戦後に書かれた小説は「通り雨」(『新潮』、1940年8月)、と「病薔薇」(『桃源』創刊号、1946年10月)が現時点で確認できた。
- 3) 金子夫婦の上海行きは、不明なところが多く、全集の年譜を含めて、事実と合わない点も少なくない。光晴自身の記述も、日時の具体性が少なく、矛盾点も多かった。従って、帰国直後に書かれた三千代の記述は、有力な証拠になるだろう。ほかに魯迅日記や前田河広一郎の作品などで解明されるところも大いにあった。なお説明のない箇所は光晴の記述による。
- 4) 金子光晴は『どくろ杯』や「支那浪人の頃」などの文章で、数度武漢の排日騒動に触れたが、ことの経緯を知る由もなかっただろう。なお「武漢水案」については、孫安石氏のご教示による。同氏「漢口の都市発展と日本租界」、大里浩秋・孫安石編著『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』、御茶の水書房、2006年、87-89頁参照。
- 5) 光晴自らは触れなかったが、彼は旅費集めのため春画も描いたという証言がある。杉本勇乗「金子さんと遊んだ上海のことなど」、『こがね蟲』第6号、1992年3月、36頁。

- 6) 前田河広一郎「支那の文学者」、『悪漢と風景』、改造社、1929年、247頁。
- 7) 『魯迅日記』、『魯迅全集18』、学習研究社、1985年、250頁。以下日記からの引用は日付が明記される場合、注を省略する。なお魯迅が買った二枚の絵、「大世界唄女ノ図」と「鉄橋」が『北京魯迅博物館蔵画選』に所収されている。前者は魯迅に「日本の美人の顔ですよ」といわれた唱詩人の絵であり、後者はガーデン・ブリッジから見た川の景色を描くものである。
- 8) この旅について谷崎がみずから「上海見聞録」、『上海交遊記』、「きのうきょう」などで熱く語ったが、谷崎と中国について、詳しく論じたものに西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム 大正日本の中国幻想』(中央公論新社、2003年)がある。中国語版『谷崎潤一郎与東方主義』も2004年、中華書局より出版された(拙訳)。
- 9) この時期における日中文化人の交流は、丸山昇『上海物語』(集英社、1987年)、小谷一郎・劉平編『田漢在日本』(人民文学出版社、1997年)などに詳しい。
- 10) 1928年4月2日の魯迅日記に「達夫より招かれ陶樂春で飲酒、広平とともに行く。国木田君および夫人、金子、宇留河、内山君同席」という記録が見られ、光晴はおそらくこれを機に魯迅に会ったと思われる。
- 11) 代表的なものとしては、星野幸雄「金子光晴と魯迅」―その、上海での出会いについて―、『野草』第21号、1978年、藤井省三「上海の梁山泊 光晴、魯迅、内山完造」、『太陽』No.433「特集金子光晴アジア漂流」(1997年4月)、春名徹「上海の魯迅―一九二九年一月二十六日」、『月刊しにか』、1991年9月、および陳齡「郁達夫と金子光晴―郁達夫と日本文人の交流」、『愛知文教大学論叢』第3巻、2000年11月などが挙げられる。
- 12) たとえば田漢は1927年来日した時も光晴夫婦を訪ねたことがあり、戦後も彼らと連絡を取っていたらしい。1968年正月に、光晴は日録に「ことは、田漢から年賀状が来ない。紅衛兵にずいぶんいじめられて、いやなおもいをしたらしいのを察する」と記し、田漢の安否を案じている(「日録(2)」、『雑纂』、全集15巻、363頁)。しかし田漢がまさにこの年に獄死してしまうとは、当の光晴も想像できなかっただろう。
- 13) 森三千代『東方の詩』「後記」、83頁。なお引用文は新字体、新仮名遣いを使う。以下同。
- 14) 森乾『父・金子光晴伝 夜の果てへの旅』、書肆山田、2002年、36頁。
- 15) 唐政「魯迅と日本の父子、翁婿、夫妻友人三題」、『魯迅研究月刊』1999年第2期、71頁による。
- 16) 藤井省三前掲文に載せられている魯迅自筆の書簡による。
- 17) 金子光晴「郁達夫と魯迅」、『三界交友録』、新評社、昭和51年、172頁。
- 18) 同上、178頁。
- 19) 金子光晴『どくろ杯』、121頁。
- 20) 森三千代『ムキシュキン公爵と雀』「序」(非売品)、上海蘆澤印刷所、1929年。国会図書館所蔵。
- 21) 同上、6-8頁。

- 22) 『どくろ杯』の中に、蘇州へ旅行した三千代が、「綢緞店のガラスのなかに飾ってあるみごとな蘇州産の火焰緞子のうつくしさに、二時間でも見惚れて立っている」(214頁)という記述が見られる。ちなみに「抗」は「杭」の誤字であり、アーチュウは杭州の上海語発音である。
- 23) 森三千代『東方の詩』、60－61頁。
- 24) 森三千代「跳舞的上海」、66頁。
- 25) 森三千代『東方の詩』「後記」、83－84頁。
- 26) 郁達夫のことと思われるが、その名前は郭沫若、魯迅(本名周樹人)、郁達夫三人を合体して作られたと考えられる。
- 27) これらのことは『どくろ杯』(130－131頁)の中にも見られる。
- 28) 白薇と楊騷については、白薇「我投到文学圈里的初衷」、鄭振鐸・傅東華編『我與文学』、生活書店、1934年、上海書店1984年復刻本所収、白舒榮『白薇評伝』、湖南人民出版社、1983年、『厦門文学』2005年第2期「楊騷專輯」などを参照した。
- 29) 森三千代「病薔薇」、93頁。『どくろ杯』にも同じ場面が描かれている。130－131頁。
- 30) 金子光晴「郁達夫と魯迅」、180頁。
- 31) 森三千代「病薔薇」、93頁。
- 32) 同上、95頁。
- 33) 同上、94頁。
- 34) 同上、91頁。
- 35) 森三千代「上海より」(金子光晴と共作)、『金子光晴全集』第8巻、316頁。
- 36) 森三千代は『東方の詩』「後記」の中で自分の思想傾向について、「その頃、日本で、澎湃としてみなぎり起っていたプロレタリア文学の気運は私にもひびきをつたえ、わたしはすぐにも日本へ帰ってそのなかに飛び込まなければならない衝動にかられたり、それができない状態のためにいらいらしたり、動揺と不安と、樂觀とが交々私を襲いました」と述べている。
- 37) 森三千代『金子光晴の周辺4』、『金子光晴全集月報』、6頁。
- 38) 金子光晴「詩人」、『金子光晴全集』第6巻、177頁。
- 39) たとえば、戦時中なお、かつての友人を思い続ける谷崎潤一郎がいれば、佐藤春夫と郁達夫のように、作品を書いて罵りあうケースもある(これらの経緯については谷崎潤一郎「きのうきょう」および上述西原大輔著書、丸山昇『上海物語』などを参照されたい)。しかし「反戦詩人」金子光晴の中国に対する心情はより複雑である。
- 40) 「創刊の辞」、『桃源』創刊号、2頁。
- 41) 光晴は三千代の初期作品について、「彼女が危かしい筆つきで書いたものを僕が一応眼を通し」たと述べている(『鳥は巢に』(角川書店、1975年、38頁)。森乾も三千代の小説を光晴が「口述筆記した」ことがあると証言している(『父・金子光晴伝』119、266頁)。

- 42) 実際、森三千代の『巴里アポロ座』(隅田書房、昭和22年)は、人物も物語の筋も『ねむれ巴里』と似通っている部分が非常に多い。
- 43) 金子光晴『どくろ杯』、83頁。
- 44) 同上。
- 45) 森三千代「通り雨」、192頁。
- 46) 上海日本人居留民に関する研究は近年盛んに行われ、代表的な著作は大里浩秋・孫安石による前掲書のほか、日本上海史研究会編『上海一重層するネットワーク』(汲古書院、2000年)、高綱博文、陳祖恩編『日本僑民在上海』(上海辞書出版社、2000年)、陳祖恩『尋訪東洋人 近代上海的日本居留民(1868-1945)』(上海社会科学出版社、2007年)などがある。
- 47) 金子光晴『どくろ杯』、85頁。
- 48) 金子光晴『どくろ杯』、83頁。上海で少女時代を過した林京子も『上海 ミッシェルの口紅』(講談社、2001年)の中でモウドン掃除のことを興味深く描いている。
- 49) 森三千代「通り雨」、188、193、191頁。
- 50) 金子光晴『どくろ杯』、96頁。光晴の「秋田義一」像も、心の清らかな日本人から(『どくろ杯』)、「支那寝台にねころがって阿片をふかしていた」(「支那浪人の頃」)支那浪人風に変えることがあり、この点からも、「秋田義一」像は創作であることが分かるだろう。
- 51) 森三千代「通り雨」、191頁。
- 52) 1929年3月31日、4月1日の現地紙『新聞報』(上海図書館所蔵)にも張群就任のニュースが写真入りで載っている。
- 53) 今橋映子『異都憧憬 日本人のパリ』、平凡社、2001年(初出1993年)429頁、同『パリ・貧困と街路の詩学』、都市出版、1998年、436頁。
- 54) 『魯迅日記』訳注、253頁。
- 55) 秋田と宇留河が書いたこの二枚の絵は、上海魯迅記念館ほか編『中日友好の先駆者 魯迅と内山完造写真集』(日中二ヶ国語、上海人民美術出版社、1995年)にも載せられている。40、41頁。
- 56) 森三千代「通り雨」、203頁。
- 57) 実際、秋田と草刈が浦東にある日本企業の支配人に画を売りに行く場面も、『巴里アポロ座』の柴崎がカフェの支配人「マダム」から借金する場面を思わせるところが多い。
- 58) 森三千代「通り雨」、204頁。
- 59) 森三千代「通り雨」、192頁。なお光晴も「龍子」も「余慶坊の二階」に住んでいるという記述から、一階での同居は前述したような三千代が病気の時など、一時避難的なものだったと思われる、秋田との奇妙な同居生活はおそらく「創作」であろう。
- 60) 金子光晴『どくろ杯』、121頁。
- 61) 森三千代「通り雨」、198-199頁。

- 62) 金子光晴『どくろ杯』、121頁。
- 63) 金子光晴『どくろ杯』、124頁。
- 64) 前田河広一郎はかつて金子夫婦に関する興味深いエピソードを披露している。それによると、三人が四馬路にある有名な妓楼「青蓮閣」へ遊びに行ったとき、妓女達は三千代を同業者と勘違いし、和装の彼女の装身具を品定めし始めたが、光晴はそれを制止せず、逆に三千代を自分の「女」という風に教えてしまい、妓女達の悪戯をエスカレートさせたという。前田河広一郎『悪漢と風景』、318頁。
- 65) 光晴は「いやなおとなり」(1966)、「支那思想の終焉」(1968)などの文章で、文革や毛沢東の個人崇拜を批判している。ただ光晴の中国批判は、時折「中国人」に鉾先を向け、白薇の時のように、「人間的におくれている」という意識も現れる。
- 66) 森三千代「通り雨」、196頁。
- 67) 同上。
- 68) 日本人のパリ憧憬および金子光晴のパリについて、今橋映子前掲書を参照されたい。
- 69) 金子光晴「支那浪人の頃」、『金子光晴全集』第12巻、235頁。ところで、光晴には日本を発つ前に書かれた「旅立たんとしてフランスを想う」(1928年10月、全集第8巻)という一文がある。そこには「全く新奇な世界」のパリ、また「フランスの明日」をしっかりと見に行こうという意欲が見られる。四十年前後の光晴のパリに対する気持にも、変化があるだろう。
- 70) 森三千代『巴里アポロ座』、10頁。
- 71) 森三千代「通り雨」、208頁。
- 72) 同上、210-211頁。
- 73) 同上、217頁。
- 74) 森三千代自身は、上海にいる間に光晴と別れようとして、前田河に相談しに行ったことがあると告白している。森三千代『金子光晴の周辺』8、6頁。
- 75) 金子光晴『どくろ杯』、103頁。
- 76) 金子光晴「上海灘」、1933年頃推定、未発表、『金子光晴全集』第11巻、60頁。
- 77) 金子光晴「支那浪人の頃」、238頁。
- 78) 森三千代は帰国後まもなく、中国の青年将校・鈕先銘(1912～不詳)と出会い、まもなく二人は鈕先銘の帰国により分かれたが、十数年後再会した。この恋をテーマにして三千代は短編小説「柳剣鳴」(1934)、中編小説「新宿に雨降る」(1953)を書き、また長編小説『あけぼの街』(1941)の中でも、これを重要な内容の一つにした。
- 79) 丸山昇は光晴の「上海より」の「向日性」に注目し、それと『どくろ杯』の調子との違いを指摘したが、しかしその差異からも「金子という人物ひいては人間というものの面白さを感じ、その両者を生んだ上海の深さ、魅力を感じる」と述べている。『上海物語』、146頁。

## 付記

小論は上述のほか、主に以下の論文を参考した。大橋毅彦「金子光晴 どぶ泥のにおいの発見」、和田博文ほか『言語都市上海』、藤原書店、1999年、石崎等「異郷の詩学(2)金子光晴と上海、北京」、『立教大学日本文学論叢』(93)、2004年12月、同「租界地天津 曙街—森三千代『あけぼの街』における感性と身体」、『立教大学日本文学』、2000年7月、金雪梅「金子光晴の上海—みずから向かう「泥沼の底」—」、『近代文学論集』2005年第31号、森乾「森三千代の文学と東南アジア」早稲田大学社会科学研究所『社会科学討究』第35巻第2号、1989年12月、桑山史郎「森三千代未発見日記」解説、中部大学国際人間学研究所編『アリーナ』、2005年3月、原満三寿『評伝金子光晴』(北溟社、2001年)など。